回収人・阿佐利与一

巳田 弥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

回収人・阿佐利与一

【Ｎコード】

Ｎ９４３９Ｙ

【作者名】

巳田　弥

【あらすじ】

「死神……ヒトはそのように俺を呼ぶが……別に俺が死を招く訳ではない」死にゆく魂を喰らわんとする“闇”から護り、未練を消して、決められたその時に魂を回収する。黒い外套を纏い鴉の濡れ羽のような髪から鋭い眼差しを覗かせる、回収人・阿佐里与一と名乗る男。明治三十一年、植物学を専攻する帝大生・真島の前にある日突然現れた男は彼が五日後に死ぬと宣告し、そうして銃を向ける？？それがはじまりであった。終わりに立ち会うことを業とする者と去りゆくヒトが織りなす幻想絵巻。

「大変、顔色が悪いね」
突然下宿の部屋を訪ねてきて開口一番にそう言った友人を、私は朝から立て続けに読みふけっていた書物の一冊を片手に、畳の上に寝転んだまま見やった。
人見知りの激しい内気の性質(たち)である私に、当初から屈託も遠慮もなく声を掛け接してくれた、おそらく大学で唯一心安い友は、岩のような印象の顔も体つきもがっしりと四角張ったやや赤みがかった浅黒い男である。
起きて相対している時もそうであるが、こうして見上げ見下ろされている状態では岩壁の感があった。
「君にかかっちゃ大抵の人間が顔色が悪いだろう、原田さん。何か用かい？」
とにもかくにも客人を前に寝転がっているわけにはいかぬだろうと腰より上を持ち上げて、膝を立てて胡座に座り直した。
「僕も座らせて貰おう」
「遠慮なく、座り給え」
「ありがとう」
律儀に礼を言って原田はどかりと腰を下ろした。岩壁は岩山になる。
「しかし、矢っ張り顔色が悪いよ」
「飯を食っていないせいだよ。ずっと本を読んでいたんだ」
「そりゃいかんな、飯はちゃんと食うもんだぜ真島さん。いくら勉強したって体を壊しちゃなんにもならない。何事も体が資本と言うじゃないか。そうだろう？　用って程の用事でもないんだが、時に君、折り畳める式の小刀(ナイフ)は持ってはいないか」
「さあ。どうだろう、持っていたかな……小さな物は大抵机の抽斗に入れているから一寸見てみよう」

胡座のまま、背後の壁に沿えて置かれた文机ににじり寄って抽斗を開けて中を見ながらかき回してみれば、暗い隅っこに手のひらに収まる長さの客人所望の品が転がっていた。
「その様子だと無いようだね」
いつまでも抽斗の中を探っている私への、僅かばかり落胆を滲ませた言葉にいいやと答えた。
「あったよ、掌に収まる刃渡りだが」
「なに、十分さ。小刀（ナイフ）なんて切れりゃいいんだから」
鷹揚な調子の言葉に、半ば呆れ、半ば彼らしい暢気さだと苦笑した。
「切るものによるだろう。そもそも君の家の方が立派なものがありそうじゃないか」
「かもしれないな」
にやにやと懐手をしている客人に、今度は完全に呆れた。
「探さないで来たのか？　どう考えたって私より君のが物持ちなはずだろう」
市ヶ谷に構える西洋館付きの彼が住まう屋敷には舶来品がたくさんある、なにせ父親が外交官の職に就いている。
本人も学校を卒業したら外交官の試験を受けるつもりでいる。
豪放磊落な性格で快活な彼にはうってつけの職業だろう。
寒い地方から出てきた陰気な庄屋の息子で、地道に植物学をやっている私とはまるで正反対。
文学部にいる彼とは入学してすぐの頃、大学構内の弁舌会で出会った。
正反対ではあったが、それが不思議に互いの不足を補いあう形で私たちは妙に馬が合った。
「いくら物を持ってたって、肝心なものが無けりゃ意味がない。まあどっかにはあるだろうが……なんとなく家の中で見た覚えもするからね」
「そんならここに来る用は、もとよりなかったのじゃないか」

「それが妹が叔母のところへ遣いに出ているもので、家の中に何がどうあるのかがさっぱりなんだ」
「母君はどうした？」
「あの人はあの人で、生まれた時から女中に何もかも任せきりにしているような人だから、やっぱりさっぱりなんだ。御父っさんに嫁入りして暫くはそうでもなかったようなんだが……いまや女中に指図して取り仕切っているのは妹なものでね。家を回している御大がいなくちゃどうしようもない」
「そりゃどうしようもないな。しかし小夜子さんはまだ十八だというのにしっかりしているね」
「そうなんだ。器量は十人並みで愛嬌も学もないが、僕よかよっぽど出来ているんだよ」
「なんだか誉めているんだか、けなしているんだかよくわからないね。こんなところで兄さんにそんな事を言われているとも知らず、お家のために働いているんだからなんだか可哀想だ」
「れっきとして誉めているんだ。小夜公が可哀想なことあるものか」
「ならいいが」
「寧ろ、こんなところで君にいわれのない哀れみを持たれている方が気の毒というものだ」
「それは失敬した。小夜子さんは可哀想じゃない」
「ならいい。これ、暫く借りて構わないかい？」
「物騒なことに使うんじゃないなら、あげるよ」
「物騒なことには使わないが、そりゃ悪い」
「いいよ、これまで使ったこともないし」
ふと、日頃から世話になりっ放しであった原田になにか礼をしたくなった。
「使う用のある人が持っていた方が道具も無駄にならない」
「そういうことなら……ありがたく貰うよ」
「そうしてくれ、それは君の物だ」

「うん。しかし、しつこいようだが矢っ張り顔色が悪いよ、真島さん。カツレツ食いに行こう」
「なんでカツレツなんだ？」
「無論、僕が食べたいからだ。適当な場所にいい店を知っている」
カツレツかぁ……と皿にのった衣付の肉を思い浮かべ食欲を覚えた途端、胃が拒否するように重苦しくなり、水すらも飲みたくなくなった。
「いや、よすよ」
「何故」
「突然そんな豪勢なもの食べたら臓腑がびっくりする。あとで雑炊でも食うよ」
「まるで病人だな」
「丸一日食べないとそんなものさ、今日のうちに読んでしまいたいんだ、散歩もまた明日」
そう言えば、まるで本当の病人だなと原田は呆れ返ったが、言い出したら聞かぬ私の性分をよく理解しているので、黙って立ち上がるとじゃあまた明日と快活に言って、私の部屋を去った。
横着者を発揮して座ったままで原田を見送り、またごろりと横になった自堕落さで本を読みはじめた。
どうやらそのうちにうとうとと眠ってしまったらしい。
燦々と西日が照らす部屋が不意に陰ったのに目を覚ました。
いつの間にやって来ていたのか、足元に人がいる。
陰ったのはわたしの全身をその者の影法師が覆ったからであった。
逆光になった黒い人影が高さも幅もあるのを寝ぼけ眼に認めて、ははあ、また原田がやって来たのだと私は思った。
「なんだい、また戻ってきたのか？　君」
「戻る？」
まるで公会堂で声楽でも披露する者のような、低いがよく通り夜露に濡れたような艶の、私より僅かに年嵩な感じがする男の声であった。

原田では、ない。
それどころか、全く聞き覚えのない声だ。
がばりと慌てて身を起こせば、顔に煙がかかって大いにむせた。
随分ときつい紙巻きの煙草だ。
「……っ、どっ……どちら様、でっ？！」
「ふぅん……」
咥え煙草のまま男は、返事とも相槌ともつかないまま、項垂れるように私を見下ろした。
まるで役者のような整った顔でいて、なにか恐ろしいような他者を圧する殺気に近いものを感じさせる男だった。
紳士風の洋装に似合わない、撫で付けない学生のような髪は鴉の濡れ羽のようで、下りた前髪から覗く目元がギラリと鋭い。
よく見れば幅があると思ったのは目の錯覚で、男が羽織る黒い外套の裾広がりなマントのシルエットであった。
それにしても、よくまあそこまで黒尽くめにできたものだと思える男の恰好だ。
ズボンも黒、靴も黒、ご丁寧に嵌めている革手袋も黒である。
右手を懐手にして、煙草は左手で口元から出し入れしていた。
「阿佐里与一（あさりよいち）」
人の部屋の畳に土足でつっ立って煙草をふかしながら、男は低い声で名乗った。
「回収人だ」
「は？」
下宿の払いは月末で、まだ間に合ったはずだ。
毎月きちんと払って、溜めたものもない。
「あの、部屋違いだと思います……」
余程たちの悪い住人がいるのに違いない。
下女や大家も手を焼いて、こんなヤクザ紛いの男を雇ったのだろう。
煙草を掴む手の、革手袋の裾から、手の甲から腕に伸びた短刀で

斬り付けたような傷がチラリと見えた。
「あー……間違えてない、間違えていないなぁ。真島誠一郎、享年二十四歳、五日後の明治三十一年十一月二十五日午後三時三十七分」
「享年……？」
「通常ならば三日前の規定だが……」
ふうっと、至極億劫そうに煙草を摘まんで煙を吐き出し、ずっと懐手にしていた右手をおもむろに取り出す。その手の先に握られたものを見てぎゃっと私は叫んで、腰から後ずさった。
「……たまに君のような迷惑千万な人種がいる」
抑揚の少ない口調で意味不明な言葉を告げられ、鈍い光を放つ、重量感のある黒い銃を腹に構えられて、私は頭が真っ白になった。
何かわめきちらしたような気がするが、後になって思い返しても記憶がない。
とにかく男は、顔面蒼白の体で動転しきった私になんの感慨も抱いていない様子で、ごく機械的に、俊敏にして正確な動作で引き金を躊躇いなく引いた。
鼓膜を破られるような凄まじい炸裂音。
しかし、当った衝撃も痛みも何も感じない……。
あれ、と固く閉じて両腕を前に抵抗の姿勢を取っていたのをふらふらと緩める、なんだ当らなかったのか、助かった……二発目ことなど失念し、放心した私の異変は一拍の間を置いて現れた。
「……ぅ、ぐぅぁっ……？！」
突然、象に踏みつぶされたらかくの如しではあるまいかという、腹部に強烈な圧迫感が生じ、私の着物の腹の辺りが見る間に黒く染まっていく。
血だ。
反射的にそう考えた。
やはり打たれたのだ、しかし痛みは無い、だがこの尋常ではない苦しさが何よりの証拠だと腹に手をやれば、腹から湧き出た黒い血

が煙となって私の両手から手首までを包む。
血じゃ、ない？？？！
「ぅ……ぁ、あ……ウワアアアアアッッ？？！！　アアアアアアアアアッ……？！」
混乱に耐え切れなくなった私は声の限りに叫んだ。
ほとんど半狂乱で、腹に手を当てたまま尻を畳みにつけたまま仰向けに、ばたばたと無様に藻掻き這いずり回る。
私の腹から吹き出し続ける黒い煙は、私の腕を這い上がって煤けた節穴だらけの天井まで昇り、行き場なく淀んで溜まっていく。
そんな怪奇極まる光景を目の前にして、私を撃った男はただそこに立ち、這いずり回る私の姿を、ややつり上がった黒い目を光らせただ冷徹に見下ろしていた。
やがて、気がつく。
黒い煙が吹き出していくごとに、あの尋常ではない苦しさが弱まっていく。
いまや胸苦しさは、寝ていた布団の上に大きな猫に乗られた程度になっていた。
なんだこれは……。
なんだこれは……？！
なんだこれは……！！
「これだけ巣食っていては、肉はおろか水も飲めんだろうな……」
ぽつりと男が呟き、口元から離した煙草を指に挟み燻らせながら天井を見上げた。
「いちいち騒ぐな、すぐに消える」
静かに、だが有無を言わさない厳しさを含んだ調子で男が言ったのに、私は彼の顔を見た。
「な……なんだお前は……っ？！　あっ、あれはっ……いや、それより、私に一体何をしたっ？！」
ふうっと、息を吐き出す音がしたと同時に、男が再び口に運んだ煙草の煙が、彼の顔回りにたなびいた。

「騒ぐなと、言わなかったか？　俺の名も何者かもさっき言ったはずだ。あれはお前を腸から喰らおうとした“闇”だ。ああして煙のように形を持たないうちは大したことはない……だが食って育てば厄介なモノになるから餌から離して始末した」

「闇……？　餌……」

「お前のことだ。死にゆく魂は“闇”の生き餌。死にゆく者が持つ未練は“闇”を引き寄せる……“闇”に魂を食われんように護り回収するのが俺の生業だ。普通は三日前から徐々にこの世からあの世へと向かっていくが、たまにお前みたいなこの世にいる間に“闇”を寄せる死臭を放ちだす奴がいる」

迷惑な話だ、と男は低く吐き捨て、他に質問はとでも言いたげに目を細めた。

いかにも迷惑極まりないと私を疎んじているのがわかる表情だった。

荒唐無稽な話だ。

有り得ない……だが、現実に男が口にした“闇”という呼び方に相応しい黒い煙が私の体から立ち上ったのだ。

そうして男の言う通りに、私は水も飲む気になれない胃の腑の心地悪さに実際苛まれていた。

はっ、とその黒い煙のことを思い出し、慌てて天井を見上げれば黒い煙はすっかり消えて跡形もなかった。

「……消えている」

「すぐに消えると言ったはずだ。帝大ってのは頭がいい者が集まると聞いていたが、そうでもないらしいな」

あからさまな侮辱にかっと顔が赤面するのを感じたが、あまりに堂々と不遜に構える男に気圧されて何も反論できなかった。

私を見下ろし、男は咥え煙草のままふんっと嘲笑のように鼻を鳴らす。

丁度、その時だった。

「真島さぁん、何かありますたかあ？」

がらりと無遠慮に部屋の戸が開いて、この家の下女が顔を出した。
「え、いや……あのっ……」
「さっきから、えらい騒いどっとです……体の具合でも悪いんじゃねかと……あれ」
とすとすとこれまた遠慮もなく部屋に押し入り私に近づいてくる。
「お顔が赤かとですが……やっぱりどっかお具合悪いんでぇね？」
そうしてほとんど仰向けに寝転がっているような体勢の私の額に手をあて、自身の額に移動させて首を傾げた。
「お熱はないようだども……」
垢染みた縞の着物の腰につけた、醤油やらなにやらの染みをつけた元は白地だったに違いない、黄ばんだ色の洋風な前掛けをくしゃくしゃと膝に置いた手で揉んで、布団を敷くかなどと尋ねてくる下女に首を振って断りながら、何故、すぐ側に靴のまま立っている闖入者について驚きもしなければ、気にも留めないのだと不可解で一杯だった私は、男を指差して下女に尋ねた。
「そっ、それより……この男について君は知らないか！？」
ついさっき怪奇を実際に目にしたばかりでも、この不審な男は大家が雇った何者かに違いないという考えがしぶとく残っていた。
「はえ？　この男って誰でさ？」
「だからっ、君のすぐ後ろの……」
言いながら、見上げた男と目が合った。
鋭く冷徹な眼差しで私を見下ろしたまま、煙草を咥えたまま男の口の端が僅かに持ち上がる。
「後ろがなんすと？　なにを仰っているんだか……わたすにはさっぱり」
「……え？」
指を咥えて、後ろを振り向き首を傾げている下女と男を交互に見る。男が不遜な笑みを深めた。
「この女に俺はいないも同じ、本来ならばお前も同様。手袋を嵌めている間だけ死に向かう者のみ、俺の姿は見え触れることができ

るが……」
　咥えていた煙草を抜き取ったのを差し出すように男が手袋を嵌めた手を突き出す。
　突き出したその手は、下女の頭を通っていた。
「この女は当面、死の予定はないな」
「ぁ、ああ……」
「真島さん？」
　慌てて動転しそうになるのを必死で抑え込み、下女になんでもないからと言い含め、本に集中するから誰も入らぬようにしてくれと言って下がらせ私は、壁際まであとずさると壁を背に身を起こした。
「し……死神……」
　ガチガチと寒さが身に沁みた時のように震える歯を鳴らしながら、ようやく口にした言葉は迷信にも程があるような言葉だった。
　それを聞いて、また男はふんと今度はやや面倒くさそうに鼻を鳴らした。
「死神……ヒトはそのように俺を呼ぶが……別に俺が死を招く訳ではない。むしろ予定された日の前に“闇”に貪り喰われるのから護っている」
「だ、だって、同じことだろう！！　さっき、魂を回収するって……！」
「さっきのアレをそのままにしていたらどうなるか、巣食った部分から臓腑ごと魂を喰われ、生きながらお前は屍だ」
　ヒッ、と喉が引き込んだ空気の音を鳴らした。
　フッと男が眼差しを細め、手にしていた煙草を放る。
　煙草は畳の上に落ちる前に、燃え尽きて消えた。
　灰も煙も残らなかった。
「真島誠一郎、享年二十四歳。お前は五日後に死ぬ」
　さっき聞いた言葉を、男が繰り返すのを徐々に冷静さを取り戻す中で聞く。
　有り得ない怪奇だ。

ぺちりと自分の頬を自分で叩いてみた。小さく爆ぜるような痛みと微かな熱が頬に広がった。

これは……現実だ。

「五日後……死ぬ……」

虚ろな私が漏らした言葉に、理解したようだなと男は懐で腕を組むと、下目に私を見て安心しろと高慢な響きで告げた。

「お前の未練は俺が消す？？」

それが、回収人・阿佐里与一との出会いであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9439y/

回収人・阿佐利与一

2011年11月28日06時05分発行